

■世界遺産保有上位国

国名	数	主な遺産
1 イタリア	41	フィレンツェ歴史地区
2 スペイン	39	アントニオ・ガウディの作品群
3 中国	37	万里の長城、秦の始皇陵
4 フランス	31	ベルサイユの宮殿と庭園
4 ドイツ	31	ケルン大聖堂
6 メキシコ	29	メキシコシティ歴史地区とソチミルコ
7 インド	27	アジャンタ石窟(せつくつ)群
8 イギリス	26	ロンドン塔
9 ロシア	20	モスクワのクレムリンと赤の広場
10 アメリカ	18	グランドキャニオン国立公園
11 ギリシャ	17	アテネのアクロポリス
11 オーストラリア	17	グレートバリアリーフ
13 ブラジル	16	ブラジリア、イグアス国立公園
14 日本	14	姫路城、原爆ドーム、白神山地

(複数国にまたがる世界遺産は除く)

■地域別の世界遺産数

アジア	139
中東	53
アフリカ	114
ヨーロッパ	396
北米	33
中南米	120
オセアニア	23
合計	878

**世界遺産** エジプトのアスワンハイダム建設で水没の危機にあった遺跡を救ったキャンペーンをきっかけに、ユネスコで72年に採択された世界遺産条約に基づいて定められている。登録された世

# 欧米の基準と溝

## 平泉なぜ「落選」

た。日本の候補で初の「落選」は、欧米を中心に築かれた世界遺産という制度で、日本独自の文化が理解されることの難しさを浮き彫りにした。一方、世界遺産は今年で登録数878件にのぼり、数年内に千件を超える。このまま増やし続け適切な保護が可能なのか、制度自体が岐路に立っている。

(小川雪、加賀元)

カナダ・ケベック市で開かれた今回の世界遺産委員会では、自然・文化遺産合わせて27件が新規登録された。南太平洋のパヌアツなど4カ国が初の登録で、文化遺産は19件。うちベルリンの集合住宅(ドイツ)、ア

ルプスの山岳地帯を貫くレーネイッシュ鉄道(スイス・イタリア)などは「20世紀建築」「文化的景観」といった、国連教育科学文化機関(ユネスコ)が新たに示した方針に沿っている。

なる。文化遺産は当初、キリスト教文化に根ざした石造りの建造物が多く、欧州に集中した。西洋中心主義や、年代の偏りがあるとの批判を受けて、ユネスコは94年、多様な文化に目を向けようと、「産業遺産」「20世紀建築」、人類と自然との共生を示す「文化的景観」を重視する方針を打ち出した。昨年登録された石見銀山は産業遺産であり文化的景観だ。

政府が平泉について、仏教圏以外になじみのない浄土思想をあえて打ち出したのも、「文化的景観」という方針に沿わせるためだった。中尊寺だけでなく、周辺の寺院跡や山も含めて、平安末期の浄土思想がはぐくん

代表部大使は記者会見で「世界遺産の登録基準は欧米の考え方で作られている。いまだに溝があると感じた」と肩を落とした。多様な文化を取り込むとしながら、選定基準は「普遍的価値」であることに、矛盾を指摘する専門家もいる。特に平泉などの文化的景観は、「信仰や習俗など無形の価値を含み、判断が難しい」と稲葉信子・筑波大学教授(世界遺産学)。

界遺産には、世界遺産基金から保存や修復のための資金を受けられる。現在文化遺産は679件、自然遺産は174件、双方の条件を満たす複合遺産は25件。日本は92年に批准、93年に姫路城など4件が登録された。

近藤大使は「アジア・アフリカ地域は、自分の思いを欧米の人たちに理解してもらおうことが必要だ」と話す。「多文化」といっても結局は西洋から見たわかりやすさが求められている。また、登録を決める要素は学術的な観点だけではない。政治的な力も指摘される。昨年登録された石見銀山は、今回と同様に登録延期を勧告され、本番で逆転した。当時、日本は世界遺産委員国で、他の委員国への働きかけをしやすかった。

組や雑誌、本で紹介され、旅行会社がこぞってツアーを組んだ。民間シンクタンク、世界遺産総合研究所の古田陽久所長は「新しい需要を掘り起こしたい。観光業界と、活性化を図りたい自治体の思いがマッチした。世界遺産はリピータ性も高く、魅力ある商品になった」と話す。古田さんは「奈良や京都などもともと有名な観光地は、登録後も観光客は横ばいだが、登録

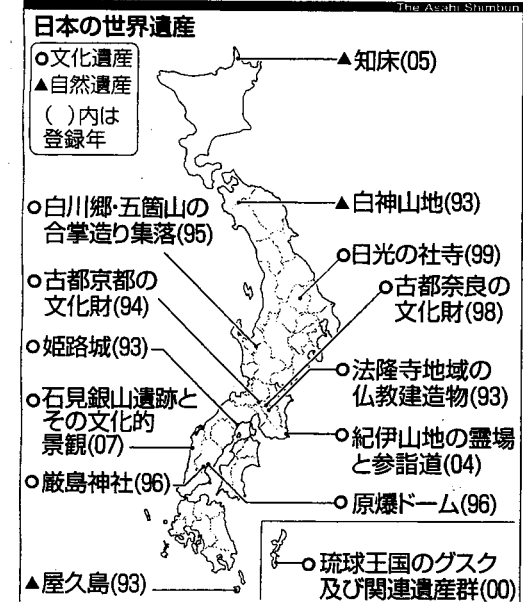
# 登録増え保護に不安

世界遺産は今のペースで増え続ければ数年以内に千件を超える。数が増すだけでは適切な保護・管理ができないとの声も上がり、近年ユネスコは登録を厳選する傾向にある。

発想の転換を求める声もある。青柳正規・国立西洋美術館長は「これからは、自然災害や環境汚染、治安などで各遺産を評価した『リスクマップ』を作り、深刻なものから順に救うべきだ」と提案する。

松浦晃一郎・ユネスコ事務局長は「遺産ゼロの国や、登録予備軍を多数抱える国も多く、合意は難しい」としつつ、「千件近くになると『上限』について議論が始まると思う」と話す。

日本は文化財の保護や修復で国内だけでなく国際的にも高い技術力と経験を持つ。99年には、ユネスコ・アジア文化センターの文化遺産保護協力事務所を奈良市に設け、人材育成などにも力を注いでいる。こうした動きをもっと後押しすることが日本の評価も高まるはずだ。



だが、自治体の世界遺産への期待は高まる一方だ。文化庁は06、07年に「推薦への待機組」である暫定リストの候補を初めて公募、32件が集まった。それまでは文化庁が調査し、候補地を決めていた。選定の透明化を求める声を受けてのことだが、熱をおおる結果にもなった。

平泉の結果を受け、政府は今後の推薦に慎重にならざるを得ない。渡海文部科学相は公募を見直す意向も示している。

川郷の観光客は、翌年には1.5倍の53万人に。02年は132万人に達した。石見銀山は登録された昨年が71万人で、前年から1.8倍に増えた。

だが世界遺産の原点は、危機的な遺産の保護。「訪れて関心を持つのはよいが、観光振興が目的になっては環境破壊を引き起こすことにもつながり、本末転倒だ」と五味文彦・放送大学教授(日本中世史)は指摘する。